

第7号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十二年八月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしずく

大西亥一郎

※アラトス(Alteios)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍した。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。

言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験が必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがつて、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型（詩・柳歌・短歌・俳句・川柳）・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長・編集長

大西亥一郎



目次

隨筆二編……小川悦子	1
俳句……夏子	4
童話「りーくんと月」……ゆきんこ	6
薄紫……奮闘記その一……高阪博一	8
不純物……大西隆史	21
登山不適格者パート2……伊藤雪山	24
編集模様(亥一郎)	33
詞……令月	37
偽りの歴史書……早蕨椿	40
例会報告	48
ー競演 うみー	
恐怖と安らぎの世界・空に愛された海の底で……大西裕子	49
おもがわりの海……高阪博一	55
天上天下……大西隆史	64

隨筆二編

小川悦子

北海道の高校生との不思議な縁

主人が、だし昆布の試供品をもらって帰ってきた。北海道の高校生が京都に修学旅行に来ていて、京都駅近くで郷土の物産品をPRしていたのだという。夕食の食材に使ったところ、まろやかで、とてもおいしかった。

「朝早く起きて、親やじいちゃんが船に乗って取った昆布です」というメッセージにもひかれ、さつそく感想を書いて高校へ送ったところ、その生徒さんから箱いっぱいのだし昆布が送られてきた。お母さんの手紙も添えられていた。

うれしくて、何度も読み返した。私のお礼状を喜んでくださっていることなどがつつつてあり、北海道とこちらとの長い距離がとても短く感じられた。このご縁を大切に

していきたいと思います。

人とのつながりが希薄になつてきたと言われるが、そうでもないと思う。人と人は心が通じれば、その輪が広がる。

年を重ねていくにつれて、その大切さがわかる。人とのご縁を大切に、出会いに感謝して生きていこう。

5月18日 毎日新聞みんなの広場



効用いっぱいウォーキング

今年は、寒暖の差が激しかったりと不安定な日が続いたが、それでも穏やかに晴れ渡る日もあった。そんなときはウォーキングへ出かける。目に飛び込んでくる新緑を見ながら、空を見上げて真つ青な空に癒される。

いつか本でウォーキングの効用を読んだが、免疫力を上げる、血圧を安定させる、足腰によい、精神的にもよいなどの優れたもの。最近は時間がとれると主人と日曜日に連れ立って歩いている。目的地まで車で出かけ、そこから決めたコースを歩いたり、家から目的地まで歩いて往復したりと楽しんでいる。

今の季節は海沿いもいい。景色によれば外国に来た気がするときもあり、夫婦で会話も弾む。車では見過ごしてしまうことも、じっくり味わえていい。今度は電車だけで、知らないところを歩こうかと話している。

5月24日 神戸新聞 発言欄

〔俳句〕

夏子の恋シリーズ第Ⅲ

6号 秋桜……ただいま恋愛中のつづき

冬、銀河……君を恋う

夏子

さらに濃くして立冬の海の碧

白鳥の思案 寒暮の濠の波



君を恋う 師走の海の雑踏へ

イルミネーション灯る 自在に師走の風

ハートフルなイルミネーション何を待つ

冬銀河 君の瞳に映るもの

つづく

「童話」

リーくと月

ゆきんこ

リーくんはお月さまが大好き

きょうも空を見上げて「あつ！お月さま」と嬉しそうな声をあげる

「リーくんが走ったら、お月さまもついてくるかな」

「きた！きた！」

「リーくんがかくれたら、お月さまはリーくんどこに行つたの



かなって言うかな」

「しんぱいだな」

「でもおうちに帰らなきや」

「バイバーイ、またあしたね」



薄紫：奮闘記その一

高阪博一

初夏の陽射しは強い。昼下がりの眩しい光を遮るためブラインドを下ろした。部屋は薄暗くなる。膝の上に置いた源氏物語に眼をやる。アーム・チェアーに肘をかけ、赤いスツールに足を伸ばす。いつもの読書態勢になって、その本を取り上げる。何となく表紙を眺めていると、徐々に文字が滲んで消えていくようだ。

下の玄関のほうで音がした。階下に下り、インターホンを取り上

げて、「どなたですか？」と問うた。こんな昼下がりの時間は新聞か、家のリフォームのセールスかで、中年の男性の場合が多い。「派遣されて来ました。話すと長いので、出てきて頂けませんか、怪しい者では

さな顔にくりつとした瞳、二重の目許、締まった薄い唇、派手な服装のわりに、どことなく知的な印象を受けた。

ありませんか、怪しい者ではありませので」と若々しい声が耳に入ってきた。ドアを開けて、外へ出ると、鮮やかなグリーンのボロシャツに、ストレートのやや薄くなつた紺地のGパンを穿いた若い女性が立っていた。ちらちら見える足元には、藤色のスニーカーが見えた。「これはラッキー」と内心でほくそ笑みつつ、彼女の顔を眺めた。小髪は短く男性のように刈上げ、小

「紫先生から『行つておいで』と言われて来ました。話は長くなるので、家に入つて、落着いてから。危ないものは持つていませので」と微笑みながら言うので、玄関先で「ごたごた喋っているのも憚れると思ひ、家に招き入れた。「上ですね。それじゃ、二階に」とスニーカーをぬぎ、階段をトントんと上がっていくので、その勢いに促されて、いつもの自分の部屋に二人で入った。

「どこに坐りましょうか？」と聞

いてくるので、赤いスツールを指差すと、そこに彼女は腰を下ろした。「これがパソコン。あれがステレオ結構、CD、ありますね」と言いながら狭い部屋を見渡し、アーム・チェアに坐つた私に眼を向けた。「紫先生が見てるのは、あのパソコンからですね。以前、スクリーン・セイバーに文字を出したと言うてはつた」と明るい声を出した。「紫先生つて？」と私が問うと、「紫式部先生ですよ。先生がパソコンから見ても、『あの読み方では死ぬまでに、よく読まへん。あんた、行つて、指導したり。読者、増やすのも苦労するわ』で、来たんです。わたしは薄紫と言います」と答えた。

「分かりましたが、紫先生が近くに居てはるなら、先生が教えて下されば、世話ないのに」と多少、不満げに言うと、「何という大それたことを言うんですか！ 先生は堂上方か、その紹介がないと指導には行かれませんか。非常に忙しいので、先ずはイチゲンさんお断りです」とぴしゃりと声が返つてきた。「先生は紫文藝工房を主宰されていて、そこにはいろいろな人が働いています。特に、先生の原稿を書き写す方々が十二人いらつしやいます。その十二人の方々が一般の人の指導員も兼ねてらつしやいます。一番が睦月先輩、二番が如月先輩と続き、十二番が師走先

輩です。私は勉強中の見習いで、工房の雑用係り、先輩方の世話係りでもあります。先輩方は主として、国文学者やその道のプロのところに行かれるのですが、あなたのようにな全くの素人にはわたしでも充分のことです。」と多少怒つたように彼女が答えた。その表情はきつとして勝気そうなのだが、何処となくあどけなさが残つていて可愛い。ふと、身内には敬語表現を使わないのでは？と思つたのだが、目くじらを立てても仕方がない。「去年の暮れから、源氏物語読者獲得特別キャンペーンをしていて、紫先生が雲の上から、日の本の国を見てらしたんです。すると、播

磨に、大それた希望を持った冴えない年寄りを発見されて、一寸いたずら心でけし掛けはつたんです。すると、その人は身の程もわきまえず、今年に入つてほとんど毎日、解説本は全く読まず、原文だけ読んでやる。紫先生つて多少イチビリで、優しい人だから、『可哀そうになるわ』と同情しはつたんです」とあのくりつとした瞳を私に向けた。

「それにしても、ここは分かりにくい田舎ですね。来るのに、苦労しましたわ」と彼女は屈託のない様子で話を続けた。「乗り物はいつも牛車なんですけど、日の本では牛は避けたほうが良いと皆が言うの

で。それで、雲に乗つて来たんです。牛車より早いけど、これにはカーナビ付いてなくて。住所探すのに、おうじようしましたわ」と言うので、「それは、それは、お世話をかけました」と苦笑いをしながら相槌を打った。彼女もクスクス低く笑っていた。

「それじゃ、いろいろ教えて下さるつてことですね」と彼女の眼をじつと見て確かめた。こんな有難い申し出を受けぬ馬鹿はいない。「そうです。私の分かる限りはね。分からね場合は持つて帰つて、先輩に聞いたり、自分で調べたりしますよ」と若干自信なげに彼女が答えた。素直な物言いは好感が持てるのだ

が、それにしては服装が派手だと思つた。外見で人々を判断するのは禁物なのだが、大丈夫だろうかと多少不安にはなつた。

「来る途中で、紫先生から参考にと貰つたアクトス第六号を読んできました。あの冊子、おもしろいですね。皆さん多士済々で。あなたの文章、ちよつとひつこいのが難点やけど」と悪戯つばく彼女が微笑んだ。「そのうち、すつきりした文章を書きますよ。それはおいとして：すると、私の読書計画は分かつて貰えているのですね」と言うと、「あの大胆不敵、身の程知らず、厚顔無恥な大風呂敷、一年で読んでしまふという計画ですね。ところで、

今、どこまで読んだんですか？」と問うので、読んでいる文庫本を彼女に差し出して、「五帖の『若紫』の半分程度です」と答えた。彼女はそれを手に取り、パラパラと繰りながら、顔を上げた。彼女の物言いは率直に過ぎる。もう少し、包む言い方も必要ではないかと思うのだが、多分若いせいなのだろう。

「それにしても、下手な字やなあ。読みにくい」と溜息混じりに彼女は声を上げた。確かに、書き込みが多い。単語の意味、我流の訳文、思いついた疑問点や感想等が、行間のあちこちに書いてある。自分で言うのもなんだが、字の拙さは筋金入りだ。そんな字がびつしりなの

だから、ここは素直に肯定するしかない。

「まあ、字の拙いのはお互いさまやけど。それにしても、細かいことこたわり過ぎ。あの六号に書いてるように、『木ばつかり見て森を見ない』状態ですね。かといって、単語の意味が分かれへんから、仕方がないけど。当分はこの方法かな



あ。単語が分かつて、それなりに、文法が分かつてくれれば、なんとか読めるようになると思いますよ。だけど、初めから詳細に入るのではなく、二頁程度はさつと通読して、それから、詳細に入った方がいいでしょうね。まあ、十帖の『賢木（サカキ）』までは

そんな読み方でしようね。それとも一つ、辞書をひくのもほどほどに」と同情したように彼女は呟いた。

五帖の半分程度で六月が終わろうとしている。これでは一年で十帖程度だ。仮にペースアップしたとしても、再来年に読み終えればいいほうだ。多少、落胆の顔になったのを、彼女が見て取って、「慣れですよ、慣れ。きつと、読めますよ。努力と意志ですよ」と静かに妥協のない口調で言い放った。ひよつとして、彼女も同じ体験者かもしれない。「それにしても、あの本の読解は難しいですよ。主語や述語、そして目的語なんか省略されているケ

ースは多いし。バンバン『給う』や『侍り』という敬語表現が出てくるし。それに文章長いし。今時、こんな文章書いていたら」と私がそこまで言うと、遮るように、彼女が「何という勿体ないことを言うのですか。自分の能力不足を棚に上げ」ときっぱりと言いつつた。「そういつても、可哀相なので、参考書を紹介しておきます。結構、アチラでも、出版物はチェックしているの。最近、復刊された小西甚一教授の『古文の読解』を読んでみたら、どうでしょうか」と彼女が言葉を続けた。厳しく指摘した後で、フオローも欠かさない。何処となく彼女が好きになつてきた。

「早速、買つて読んでみます」と礼を言いながら、「それにしても、和歌の解釈は、これも難しいですね」と私はまたアドバイスを期待して聞いた。「わたしたちは小さい頃から和歌を勉強させられました。それに琴なんかの音楽の勉強も、わたしは音痴でしたけど。古今和歌集は必携の本で、丸暗記。記憶力が悪いので、それはそれは苦労しましたね。何かいうと、和歌でしよ。貰うと、すぐに返せでしょう。字が下手だから、よけいに……。困ったことも多かったですね。最近は何と歌といつても話し言葉で率直に書くものが結構あるけど、昔は婉曲でしょう。おまけに、掛詞や縁語と

比喩、難しいですよね」とどこななく同意を求めるように彼女が答えた。「出来れば、『古今』の六巻まで、春夏秋冬の歌は読んでおいた方がいいと思うけど、そんな余裕ないですよ。まあ、取敢えず、今は感性の問題ということにしましよ」と優しい眼差しを私に向けた。「その感性もなければ、どうすれば良いのですか」と質問しようと思つたが、こんなことを言つても、彼女が困るだけなので、これ以上和歌の話せず、話題を別のことに向けた。

「それにしても、『光るの君』は早熟でブレイボーイですよ。ハイテンションから熟女まで、多少娼婦気

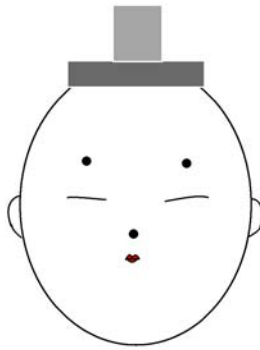
味から帝に連なる家柄の人まで、まったく手当たり次第という感じ。今で言うところ、石田純一みたいでしょ。まあ、あの人には帝に連なる家柄の人は無理でしょうけど……。石

田さん分かります？」と彼女の顔を覗き込んだ。「よく、知っています。アチラにもゴシップ記事の好きな人は多い、わたしも興味あるし。

あの人は単に薄情なのでは？それに外見もわたしたちの基準ではありません。ふつくと丸顔で、すーと引いたような眼、小さな口、それに品というものがなければ。だけど、海老蔵さんの『光るの君』は将に皇子という感じで、綺麗でしたね。最近、婚約したんですね、残念

ですね」といつきに話し終えた。時代によつて基準は変わる。さて、彼女は帰つて、私のことをどう報告するだろうか。

「つまり、性欲を単に追うだけではないのです。『色好み』ということなんです。この男女の関係には、し



みじみとした風情というものがないてはなりません。品があつて、優

雅で、そんな関係なのです。『情け情けしく、契り給う』なのです。これは先輩方の受け売りですが、私にはまだこの世界のことをよく理解できませんけど」と恥ずかしそうに付け加えた。まだ若い彼女には分かりにくい世界のような。かといつて、年老いた私にも謎の多い世界なのだ。仮にこの世界が分かつていけば、何とか賞の一つや二つ、確実に取っていることだろう。

「モデルはあるのですか」と私がまた問うた。「あるようですが、はっきりとは分かりません。先生は『光るの君』を大変いとおしんでらっしゃいました。先生が独自に創りあげられたのだとわたしは思っています

す。しかし、時折、道長様が工房にいらつしやつた時の先生のお顔は、『光るの君』を考えてらつしやる時と似ていたような気がする。と先輩方が言われているのを聞いたことがあります」と彼女が思い出したように答えた。「先生は道長様に請

です」と憧れるような眼差しで答えた。薄紫さんは相当、紫先生に入れあげているようだった。こんな若い人にまで、憧れを持たれる紫先生に会いたくなつた。絵でしか想像できないのは残念でならなかつた。

「工房の経営も大変なんです。源氏物語一本でしょ。五四帖別売りもしますが、帖によつて売れ行きには差があるし、全帖一括は最近なかなか売れません。それに、その時々流行があるから……。こんなキャンペーンもやっているんです。その割に、先輩方はじめ私たち、リストラされないます。先輩方も昔のように年功序列じゃなく

て、能力主義になつてきているから、それはそれは厳しいんですよ。だけど、先生は従業員を大事にする方針を持つておられます。ひよつとして、どこかに凄いパトロンがいるのかなー、何て」と悪戯つぽく笑いながら彼女は声を落とした。この手の話は好きなようだ。「パトロンね……」と言いながらこの種の質問は長くなると思つたので、私は別のことを聞くことにして、話題を変えた。

「この物語には庶民という人々が出てきませんね。まあ、王朝物語、セレブの放蕩物語ですものね。薄紫さんはどう思います？」と聞いてみた。「またまた」と彼女が微

いてみた。「またまた」と彼女が微

笑んだ。「どこかの国のように、首相がコロコロ代わることがない、安定して固定されている社会です、良い悪いは別にして。読者層も貴族が中心ですから、庶民のことを書いても面白くないでしょうし、分からぬことも多いでしょう。その読者層は相当の読み手で、教養も豊かです。だから、貴族の生活を中心に、心理描写や宗教観なんかを基本にして書かれたと私は思っています。もつとも、働いていないのだから、することと言えば、恋愛しかないかも……。まあ、あなたが読んでおられるところまででは、『夕顔』に庶民の生活の一端が出てきますが、騒がしい・珍しいという感じの記

載だけです」と彼女は真面目な顔で答えた。薄紫さんが分からなくなってきた。若い娘のように、フランクな物言いがあるかと思うと、落着いて分別のある臆たけた女性のようにも感じられる時がある。

「生活様式の違いつて分かります？」と今度は彼女から質問があった。「なかなか、分かりにくいですね」と私が答えると、「これも勉強ですが……」と言いながら彼女は続けた。「イマジネーションの問題です。平安時代を想像して、そこに身を置いて考えるんです。現在から観るのではなくて」と彼女は言うて、話を続けた。「貴族の家つて、兎に角、広いんです。今の建売住宅や

マンションなんかと比べようもありません。まあ、日の本の学生さんが教科書で見ている『寝殿造り』の挿絵では難しいかも……。上流になると敷地が一辺百メートル以上もあるようなところがあるのでしたら。だから、庭も広いし、家も大きい。その広い庭を整備して、四季の草木を植える。当然、自然に対する感覚は鋭敏になりますよね、いつも、季節を見ているのだから。住居も広い。だから、一寸忍んで行つたぐらいでは、隣の部屋は分からな。それに、闇と月ですね」と言つて、彼女は言葉を区切つた。

「ちよつと、疲れました。何か飲み物はありませんか。私、コーラが好

きなんですけど」と遠慮がちに彼女が言った。そう言えば、何も出していなかったことに気付いた。下の



冷蔵庫を探したが、生憎コーラはなかった。それで、冷たい麦茶を持つて上がった。「麦

茶ですか…」多少落胆したようだったが、それをゴクゴク飲んで、また、私の方を見た。

それにしても、彼女は今の世界をよく知っている。彼女の住んでいる世界はどんなところで、どんな生活をしているのだろうか。

「漆黒の闇って言うでしょ。兎に角、暗くて前が見えないんです。そ

んな闇には、吸い込まれていくような、そして、得体の知れないものが住んでいるような理解を超えた感じがありますよね。アチラからよく

見ているのですが、日の本は今明るいですよ。こんな明るいところには『物の怪』が出て来れません、気後れして」とくすつと笑いを漏らした。「それに、暗くて見えないから、『空蟬』と『軒端荻（ノキバノオギ）』とを間違ふというような場面が作れると思うんです。ベッドの傍にスタンドがあるようなところでは、笑い話ですよ。リアリティ無さ過ぎですよ」とこれも面白い言い方を彼女はするのだった。

「また、暗い闇だから月が明るく

て綺麗なんですよ。こども、田舎だけど、街灯があつて、夜でもそれなりに明るいですよ。人の多い都会なんかは、もつと明るい。こんな明るいところでは、月は余り関係ないですよ。満月であつても、雲に隠れて辺りが暗くなつても。今の人たちは、お月様の大事さが、だから分らないのですよ」と彼女は窓のブラインドの方を眺めて言った。太陽暦になつてしまつた今では、月というより、太陽だろう。月を意識するのは九月の十五夜の頃だけだろうか。確かに、月明りと言われても、それ程、思わなくなっているのは事実かもしれない。薄紫さんはこうだと思つと断定してしまふ人の

ようだ。

薄紫さんと話していると、この物語の女性についてどう考えているのか聞きたくなつた。

「まだ、五帖を読んでいるところなので、はつきり言えないのですが、出てくる女性は、何となく儚げな人が多いですね」と言つてみた。薄紫さんは「そうですね」と言いながら話を続けた。「男の人に依存した生活ですね、だからかもしれない。男の人に囲われ、通つてくるのを待つ、精神的にも、経済的にも自立はしていませんね」と多少堅い答えが返つてきた。「だから、『あはれ』ということが、ポイントになるのかも」と言いながら、「それでも、

面白い女の人の描写があつたですよ。『簾木（ハハキギ）』の前半、雨の夜の品定めに出てくる『浮気っぽい女』で面白いでしょ」とくすつとまた笑いを漏らした。

「宮中で仕事が終わつての帰宅時、偶々、同僚と牛車に乗る。同僚は女の所へ行くと言う。興味半分で付いて行くと、自分の交際している相手だつた。男の人の評定は浮気っぽい女はだめだとなるけれど、わたしはバイタリテイのある女性だと思つてゐるんです。男を手玉に取るなんて痛快でしょ」とまた悪戯つぽく笑いながら、ウインクして私を見た。おそらく、女性の職場は限られていただろう。そこで、

生きていくには、仕方の無いことかもしれない。倫理観云々は今の考え方であつたのだらう。

「わたしもそんな生き方をしていたかもしれません。偶々、いまの工房に就職できたから、その生き方はしなかつたけど……先にも話しましたが、工房も厳しいんですよ。リストラはないけど、将来、賃金力ツトもあるかもしれませんが。そうなら、ワーキング・プアーですものね。まあ、この仕事、好きですし、紫先生のように作品が書けたらつて思つてゐるので、頑張るつもりです」と彼女が妙に真剣になつて言葉をつないだ。こんな話を聞くと、彼女の仕事振りが気になつたが、雑用

係り、世話係りなのだから、それなりに想像はつく。努力家の彼女のことだ、いろいろの困難はあろうが、それを越えていくことだろう。そのうち、傑作をものにするかもしれない。

「暑いでしょ。これからの季節は、この部屋、最悪」と言うと、彼女は愛らしい笑顔を向けて、また喋りだした。「梅雨に、それから、夏は嫌ですね。湿気多いから、ポロシャツに薄いGパンで来たけど、汗だく。それにクーラー、誰かさんは付けてくれへんし」と皮肉つぽく言った。「年金生活者は節約が大事なんです」と私が答えると、「それも、程度もんやと思うけど……。やつぱり、

季節は春と秋がいいですね。紫先生も多分そうですよ」と彼女は話を続けた。「春は花がこぼれるようにいっぱいになる。命の輝きというものが感じられる。秋は実りがある

かもしれないが、その後、どこことなく哀しみが潜んでいる、横溢の後のうら枯れた哀調。一寸受け売り」とまた笑った。薄紫さんはそれにしてもよく笑う人だ。「先生が先輩方に言われる言い方を聞いていると、何となく分かるんです。言いは突き放しているようでも、心がこもっているのは弥生先輩と長月先輩ですもの。先生の愛情の程が痛いほど伝わってきます。結構、下のものは、こんな接し方を注意

深く見ているものですよ」とパソコンの横に置いてある時計をチラチラ見ながら彼女は静かに言い切り、「そろそろ、雲の迎えが来るジ・カン」と付け加えた。

時間が相当経っているのかもしれない。まだまだ、聞きたいことはある。『文章の変幻自在な調子の良さ』について、『初めから計画して全巻を書いていったのか』について、『巧みなプロット運び』について、そして、『もののあはれ』について等々。しかし、薄紫さんはアチラに帰らなければならぬ。こんな楽しい時間は丁度三ヶ月ぶりのことだ。居心地の良い時間は早く過ぎていく、多少の淋しさを残して。命じら

れたとはいえ、遠いところをわざわざ来てくれたのだ。何か感謝の印をおくりたいと思うと同時に、もう一度彼女に会いたいと思った。

「ちよつと、待つてもらえます」と言しながら、私は黙つて文庫本の方を眺めた。下手に違いないが、『光るの君』に倣つて、和歌をおくりたいと思つた。彼女をじつと見ていると、徐々に言葉が頭の中ではつきりとしてきた。「いまこんな和歌が思ひ浮かびました。見てくれますか？」と言つて、眼に入つたメモに、

露ありて輝き光る朝顔の

タペゾ消ゆる薄い紫

と書いて渡した。すると、彼女はそれを見て、「返せて……。あなたも相

当ヤリタガリやわ。それに、下手同士やのに」と意味ありげな顔をしながら、ニヤリと笑いながら、その下に、何かを書いて私に差し出した。

また咲くと薄紫の誓いしも

心かきくる消ゆると思えばと書いてあつた。字はなかなかのものだ。彼女はやはり奥ゆかしいのだ。

「字、上手やないですか」と私が言うのと「今とは下手のカテゴリーが違います。それにしても、万年筆は慣れてないので、書きにくいですね」と彼女はしたり顔で答えて、キヨロ、キヨロとパソコンの辺りを見ていた。「どうしました」と問うと、「それスキャナーですよ。そのメモ、ス

キャンしてもらえますか？ 帰つて、出張報告の添付書類にしますので」と恥ずかしそうに私に言つた。

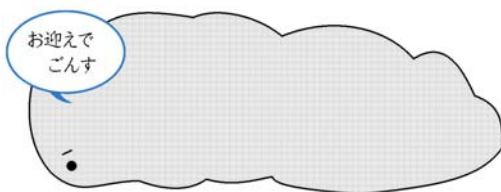
「キャンペーン期間ははつきりしていませんけど、多分、今年の暮れくらいまで続くと思います。アチラはのんびりしていますから」と言いながら「パソコンに向つて、精々、言いまくつてください。そうしたら、紫先生が、また、『行つたりや』つてきつと言われると思いますから」と優しい笑顔で彼女が言葉を付け足した。

「分かりました。これから、毎日読むことを続けていきます。そして、読後には必ず、パソコンを見て、薄紫さん、薄紫さんと連呼します

よ。また、会いたいですから」と私も笑いながら答えた。「それじや」と彼女がスツールから立ち上がった。「多分、玄関先に、迎えに来ていると思うけど。雲は時間にルーズなところ、あるから」と言いながら、振り向いて、「そのまま、そのまま。出張報告、どう書いたら、ええんやろう。多分、紫先生、パソコンから見えてはったやろうね」と送ろうとして立ち上がった私を制した。ドアの方歩いていく彼女の後姿をぼんやりと私は眺めていた。鮮やかなグリーンンのポロシャツと薄い紺色のGパン姿が、ドアに吸い込まれていくように消えてしまった。

下の方でベルの鳴る音がした。「薄紫さん、忘れ物でも、したんかなあ」とブツブツ言いながら階段を下りて、玄関のドアを開けた。「何か、忘れ物？」と眼を擦りながら言うのと、「なに、寝ぼけてんの！」と昔は薄紫さんのようだった勤め帰りの『北の方』が、買い物袋を両手に持つて、仁王様のように立っていた。「おかえり」と言ってもまだ階段を上がり部屋に入った。何気なくスキヤナーの方を見ていると、急にその蓋を上げなくなつた。「あるわけが…」と苦笑いをこぼしながら、私はアーム・チェアーに腰を下ろし、ぼんやりと赤いスツールを眺めていた。

了



不純物

大西隆史

正しい行いをしろ

正しい姿勢であれ

正しい生き方をしろ

人は皆　口々に正しさを言う

何を持って正しいとするのか

人は皆　口をつぐむ

清らかな行いをしろ

清らかな心を持て

清らかな人柄であれ

人は皆　口々に清らかさを謳う
清らかであれば幸せになれるのか
人は皆　口をつぐむ

清廉潔白を人は教える

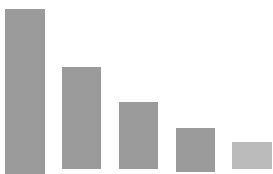
白は正しく　黒であるべきではないと
そういうあなたは白なのですかと問う
微笑はなにも語らない

太陽と月

昼と夜

陰と陽

光には影があり　影が光を生むというのに



人々は白さを追い求める
なぜだ

不純物のない正しさはもうい
不純物のない美しさはもうい
人には不純物が必要なのだと
不純物こそが人を人としているのだと
私は静かに想う
それを想う私のころもまた
不純物なのかもしれないと

登山不適格者。パート2

林住期

単独行は冬の来日^{くるひだけ}岳への冒険記

二〇一〇・一・二九・三〇

伊藤 雪山

日はすでは西に傾きつつあった。冬の日差しは急に弱まり少しずつあたりの空気はひんやりしはじめた。私は静まりかえった雪の積もった山道をひたすら歩き続けた。それは雑木林の中の緩やかな登り斜面に沿ってはるか遠く目指す山頂に向かって繋がっているように思えた。数日前に降り積もった雪は、ところどころで多くなり、少な

くなりながら、それも次第に嵩を増してさらに深く道を蔽い隠しているようだった。どのあたりからか

気がつかなかったのだがふと人が歩いた足跡が目に入った。形からしてそれは数日前に歩いたと思われる。続いているその足跡に自分の靴を重ねて丹念に一足一足トレースしながら前へ進むものの、ときにそれは途切れていて登山靴は雪の中に深くはまり込み前進は容易ではなかった。勿論、冬山の装備など持ち合わせていない。時間は必要以上に過ぎた。

よくもまあ、遭難捜索隊の世話にならずに無事に帰ってきたもの

だと思つて思つた。

ことの始まりは、娘夫婦の「カニ食べにいかへん」という誘いの言葉だった。日ごろ、私たち夫婦は彼らの二歳半になる子ども、つまり、私たちにとっては可愛い孫なのだが、その世話のため週に何回か車でお迎に行き、のどかな田園の稲美の家で遊んで、夕方、時間がくれば大久保の家へ送り届けた。だから、しまいには、私たちのことを稲美保育所などと冗談まじりに言っていた。妻は孫の世話をするのは苦になるどころか、よくこんで車でお迎いにいつている。いまだき、一般には世話をしやっていると



午後の四時半には旅館には入れると踏んで、「これでよし」計画は仕上がった。しかし、山には入るにはかなり遅い時間であることの意味はそのとき頭になかった。

「来日岳登山口南側」

この日、但馬の天気は絶好の登

山日和というわけではない。この時期としてはまずまずの天気である。日中は大方晴れ、後半夜半遅くにくずれるとのことだった。円山川に沿って走るJRの線路、それに平行して走る国道を南に二十五分ほど歩いた。地図の通りJR線路の橋梁の下をくぐり、西方向にさらに500m行くと来日岳登山口の道標があつた。鹿がでていくのを防ぐため張られた金網があつたがその柵を開きそこをくぐって北に向かう山道に入った。山の南側から北に向かつて登る山道である。のつけからの急登だったが麓から山頂に向かつて気持ちはずんで

いた。

行く登山道のところどころに雪が残っていた。この時点では、ああ、やつぱり、一月下旬なのだ、まだ、雪もあるんだと軽い気持ちでいた。ところが急登な山道を登り、小さなピークを越えさらに下り斜面についたところから次第に積雪は多くなつた。数日前から降り積もつた雪は融けずに深く静かにそのまま残つていて行く道を遮つた。さらに鞍部さしかかると「来日岳中間地点」の道標があつたがそこまで来たときはすでに積雪30センチにもなつていただろう。あたり一面を蔽いつくしていた。そこからまたなだらかな登り坂だが登山

靴は次第には深くはまりだし一歩一歩は容易ではない。それでもまだ先の山頂を目指して雪の中を這うように登って行った。

深い雪の中の人の足跡はときにとぎれた。動物の足跡らしきものも見え隠れしていた。上に登っていったようでもあり、また、歩幅からみれば、上からおりてきたもののようにもあつた。犬を連れて歩いたものか、単独の猪が歩いたものか、どんな人が通つたのだろう、数日前の様子を思い浮かべた。この時点では引き返そうなどの思いはひとかけらもなかつた。なぜなら、頂上を通り越しさえすればやがては、雪は



少なくなる、そう思つて心は来日

岳山頂へ向かつていた。予期せぬ事態に遭遇することになろうとは思わずに。

カンジキがあれば、思いのままに動きが出来るのだが。

カンジキは、雪山での移動では必携の装備である。中国山地の山間の雪国で育つた私は、冬には、深い雪の中、狩猟会の人たちが冬の獲物を捕るために往き来していたのをいくらかでも見て知っていたし、私自身も実際にはいて歩いたことを記憶している。

深い雪上を歩いても足がもぐり込まないように靴の下につける輪状になつた歩行器具である。

私の予想をはるかにこえてます
ます深くなつていく雪山、早くここ
を抜け出したい。下から見上げる
といよいよ頂上付近にヒュッテらし
き小さな建て物が見えた。斜面に
雪でうずもれたプレート標識は
あと「山頂まであと一〇分」とか
かれてあつた。そこをめがけて進む。

傾斜した雪の山は、ほんの一〇
mたらずの距離を進むのにも、登
山靴は雪の中に深くもぐり込み
普通の倍以上の時間がかかる。頂
上にたどり着いたときには普段の
山頂到着とはおおよそかけはなれ
た気分、周囲の景色など見る余
裕もなく惨憺たる思いだつた。こ

に居座ることはできない。ときに積
雪で身動きもできなくなると右手
のステックを雪の上に横にして支
えて少しでも体が雪の中にめり込
まないようにして、腹ばいになつて
泳ぐように這つて進んだ。

見え隠れした足跡はヒュッテに
は立ち寄つていないようである。と
にかく早く前へ進む、でもそうは
いかなかった。

私はその頂上を横目に通り返
けて、やがてやや下り斜面になつ
た。雪道を歩くといえども少しは
楽になるはずだ。大幅に時刻は過
ぎていた。もしものことを考えて、と
にかく現在位置を知らせなくては
と携帯電話を取り出して城崎の

旅館で待つているはずの家人に知
らせた。「雪が深い、大幅に予定よ
りおくれて今、やつと山頂だ」言葉
は少し震えていた。自然に心細さ
が声にでていたように自分でも思
つた。携帯の向こうから落ち着き
はらつた声で「なんでそんなところ
へいくん」というものだつたが私には
その言葉が痛く胸に刺さつた。

これから先、予定のルートは山頂
からやや山を下るが連なる山系
を迂回しながら、さらに深い雪で
覆われた山中をアップ、ダウンを
繰り返して、芝生平、紅葉平を通
りさらに大師山頂に登り温泉寺
から城崎の街へ向かうものだ。

この雪の様子では前途多難である。その時点では、早や午後の3時過ぎだったと思う。

地図を見ればやつと全行程の3分の1まで進んだところだ、この雪の中これから先どれくらい時間がかかるか全く見通しがたたない。そんなことはいまさら考えたつてどうにもならないことだった。ここまでは来てしまっている。登山はいつたん登り始めたら途中でやめることができない。一度山に入ってしまったら代わりにほかの人に下りてもらおうというわけにはいかないのだ。泣こうがわめこうが自分の足で下山するしかないのである。

悲壮な思いで歩くこと数時間。いよいよあたりは暗くなってきた。私は背負っているザックを肩から下して小型の懐中電灯取り出したが、少しでも早く前へと気持はあせていた。私はその時間さえも惜しんだ。

夜空の月は満月らしく冴えて明るかったが、くりかえし流れるどす黒い雲にさえぎられるとまた妙に暗くなつた。寒々としてきた。それは私の焦燥感をさらに募らせた。私は喧騒の街から離れて人の気配も無い暗くなりかけた雪の山中に佇むわが姿を恨めしく思った。重くのしかかる不安を抱きな

がら進む中、これまでの気持ちがいくらかでもやわらいだのは道標を見つけた時だった。それは薄暗い中、雪を被つて立っている。私は急いで近寄り持つている懐中電灯の弱い光で照らした。プレートに書かれた文字は「大師山頂へ、桑の木の下へ」と2つの方向を指し示すものだった。どちらにしろ、山の北側の斜面の雪は一層深くなつていくようだった。

「今、どこですか、道はわかりますか」「うん、わかる」娘の夫との携帯電話の言葉少ない交信だった。

暗い深い雪の山道を時には、崖に遭遇しながら下りて行つた。その

後何時間歩いただろう。無我夢中だつた。大師山をぬけた。しばらくしてやつと温泉寺奥院にたどり着くとそこから下山道は雪と暗闇のなかで全くわからない。地図と方位磁石を再度取り出し、懐中電灯を照らして探した。奇跡的に見つけた暗闇の中の急な雪の坂道だつた。私は無意識に駆け下りて行つた。遠く山の下方に城崎の街の灯りがみえた。旅館で心配して待つてゐるだろう家人たちの様子が思い浮かんだ。携帯電話は電池切れですぐに通じなくなつていたのだから。

予定は大幅に遅れた。登山靴の

中まで水ですぶ濡れになり、すっかり憔悴しきつて宿に着いたのは暗くなつた午後7時すぎだつた。出迎えてくれた旅館の主人と話しを交わした。「よくもそんな無暴だね」。そして、ついでしたがたまで家人も玄関の外で待つてくれていたようだつた。肝心の夕餉は正に始まろうとしていた。私は風呂は後回しにして、すぐに、テーブルについた。乾杯。遅れたことをお詫びして雪山での六時間半にわたる彷徨のひとコマをぼつりぼつり語つた。

今回も山を甘く見た。侮つた。結果的にはそういうことになる。

第一の原因

一月下旬の但馬の山は、ガイドブック資料によれば一月、二月の登山は不適切、シーズンオフなのである。平地は天気で雪などどこにもない。山での遭難事故の原因は、夏と冬では全く様相を一変させるのを知らないということだとある。翌朝わかつたことだが。城崎駅前には、かき集められた雪が一m五十cm以上ほどの高さに積み上げてあつた。

第二の原因

山の南と北側とでは雪の積もる量は全くといつていいほど違うのだろうということである。山の北側の

斜面に移るにつれて次第に雪は、膝から腰へと深くなつていった。行く道すがらある程度予想できたものの今回は想定外の深い雪だつたこと。頂上からの予定のルート

は正に南から北へ尾根ずたいに迂回している。もう少し、もう少し前へ、前へとただひたすら進む。気が付いたころには、後にも、先にもどうしようもないところまで来ていたことだ。

第三の原因

山登りの基礎・基本を全くいかげんに考えていたことである。即ち、どんな山登りでも午前中に頂上へ到着し午後に下山を始めて

日没一時間前には公的交通機関のあるところまで、という原則を無視したことである。

今後のこと

何か目的をもつて行動する場合、PDICという言葉がある。計画、実行、評価が大切であることは十分わかる。アバウト、いかげん、思いつき、なりゆきにまかせる、これは私の性分なのかもしれない。とりあえずコースについて地図を見て、調べはするものの到底万全というようなものではない。むしろ不完全を楽しむという、そこから生まれる偶然性と、ある種安っぽい冒険心を掻き立ててみたい、楽し

たいそんな気持ちで常に心の底のどこかにあるように思うのだ。所詮は自然に遊ばせてもらっているのだから。

しかし、家人や周囲から注意、非難された時は、それに合わせて失格者の自分を責めてスイングしているもう一方の自分がいる。それは予想だにしない雪の山だつたとか、スタートの時間が遅いのか、言い訳しながらである。そして、極めつけは、反転し貴重な体験だつたと、自分を肯定する極めて身勝手でご都合主義の自分がそこにいたことに気がつく。

人のタイプにいろいろ。几帳面、大雑把な、緻密なタイプ。究極な

ところへくればその性分があぶりだされるところはある種当たっているのだろうと思う。

本当に死の極限の淵にいた経験を多く積み、そこを潜りぬけてきた人ならそう大雑把なことはいないだろう。とにかく考えを甘く持つてはいけない。毎年山で亡くなる人は沢山いる。こうしている今もラジオから遭難の事故のニュースが流れている。今の私と同年代の七十歳ぐらいの3人が雪山に入り、予定の時刻になつても帰つてこない、捜索隊が出たと伝えている。

おわり



編集模様

アクトスも設立後まもなく2年である。組織もそろそろと整えねばならないが、今回はどのようにアクトス誌が製作されているかお伝えする。

次の写真は、僕の住むマンション書斎のパソコンとプリンターである。ここで主にネットで送られてきた原稿を、アクトスのファイルに落とし込む。また現在お二人が郵送されてこられる原稿を入力する。基本的な校正、割り付け、装飾・レイアウト（割り付けとダブっているなあ……）、カット・写真の挿入などをする。一太郎というソフトの冊子印刷機能なので、内容の増減、変化にあわせてページは自動でふられる。しかし、最初の目次は作成する。



原稿は概ね届いた順に埋め込んでいくが、60ページ前後で、完成まで2、3日かかる。

文字の入力より編集レイアウトというのに手を取られる。

一応完成すると、キヤノンのプリンターで一部を作成し、点検して打ち直す。その後再度一部を印刷して、妻に点検してもらう。アクトスの最初の読者は妻である。

さて、次いで印刷だが、少なくとも50部は作成する。

カラー印刷が出来るのは素晴らしいが、なに

せ家庭用プリンターである。2台をフルに動かしても、時間がかかる。60ページだとA4が15枚、裏表に印刷されるから一冊で30枚の印刷。50冊で1500枚の印刷と言うことになる。実際は70ページくらいだからもう少し多い。

インクは5本くらいがなくなり交換する。



紙も一度に数十枚くらいしかセットできない。

印刷は勿論自動だが、インク切れや

給紙切れで止まるので、目はあまり離せない。

この印刷に最低丸一日かかる。

完成すると表紙を印刷し、ついで写真のよう

な中綴じホッチキスで一冊につき3ヶ所を留める。60ページでも大変だが70ページになると厚くて手が痛くなる。紙がずれると困るので結構気を遣う作業である。



ある。

出来上がったものは2時間くらいプレスする。時には厚い雑誌に挟んで僕が上から乗って押さえつける。

実は、厚い絵本2冊の間に挟んで、椅子の上に置いて、止める

おしりを乗せる……。

この後は裁断である。

2、3枚なら支障ないが、15枚のA4を二つ

折りにすると、端が山形に盛り上がるから、そこ



をカットする。そうしな
いと読むと
きに開きに
くいことにな
る。

これも一冊
ずつを、カ
ッターに挟
み込んで切
り落とす。
紙を切る
と刃こぼれ

も結構あるし、カッターの刃の下のマットも割合
頻繁に交換しなければならない。

とまあ、普通の人生ではあまり経験すること

のない、そんな妙な仕事をするようになった。

こうして完成すると、あらかじめ用意してお
いた封筒にタックシールを貼り、冊子を入れる。
セロハンテープで封をする。ここまでも一日近
くかかる。

これを近くの「セブンイレブン」に持参する。
メール便にするためだ。1センチ以内ならば8
0円で送付できる。ありがたいことである。

大型のカラーのページプリンターや、電動裁
断機などがあると作業効率は格段に上がるだ
ろうが、それは無理だ。

殆どが手作業だが、なにはともあれ、カラー
印刷の冊子が自宅で出来上るとは驚いた時
代である。

IT（最近ではICTという）という技術、パソコ
ンやインターネットは、15世紀のグーテンベル

クによる活版印刷発明以上の「文化的な革命」をもたらしたのかも知れない。

鉛活字は中世暗黒時代に終わりを告げ、キリスト教の宗教改革と、文化改革をもたらし、世界中を大変革の渦に巻き込んでいった。それは、それなくしては成立しない産業革命と近代社会成立の一大要因である。

ひよつとすると、20年ほど前から急速に広まりだしたIT技術は、世界が大きく変動し変わりゆく原動力なのだろうか。いまその入り口に立っている気がしないでもない。

……、とまあ、雄大なことを考えた。

さて、このアクトス誌、初めてご覧になる方の中には、印刷屋さんで作っていると思われる方もいるらしい。

ホントウナラバ、ウレピー…。

いずれ、三億円の宝くじでも当たれば、専用の編集・印刷室を造るつもりである。

予定は四劫ほど後のことになりそうだが、出来れば一、二年の間に…、無理か……。

(亥一郎)



「詞」

言えない言葉

令月

涙が止らない

現実の私は涙を流していないのに

心の私はずっと涙を流している

どうして気付いてくれないの…

久しぶりに会えたのに

そのことを喜んでいたのは私だけなのかな

とても嬉しくて とても幸せで

満ち足りていたのにね…

私の隣で嬉しそうに他の人の話をする貴方

ねえ その人を思い出して笑っているの

その瞳は私を通して誰かを見ているの

「貴方の横にいるのは私なんだよ」

そう言いたかつたけど言えなかつた

駅での別れはいつまで経つても慣れなくて

少しでも長く一緒にいたくて下らない話をする

時が止まつてしまえばいいと願いつつ

貴方が時計を見ないように願いつつ

頭の中で必死に次の話題を探してる

「さよなら」の言葉は残酷だね

今だけはそう思う

いつも振り返らないで行ってしまう貴方
その背中に走り寄って抱きつきたかった
笑顔での「さよなら」なんて大嘘で

行かないで 帰らないで 側に居て

本当に言いたい言葉は結局言えず仕舞いで
貴方の姿が見えなくなつてから
涙が零れた



偽りの歴史書

早蕨 椿

一人の青年が雨の降る空を庵から眺めている。薄墨を引き伸ばしたような空から降る雨は何故か透明で、それが不思議でならないというように、青年は縁側から手を伸ばして雨を受け取る。濡れた手を眺めながら溜息を吐く。青年の手には一通の手紙が握られており、そこには短い言葉だけが書かれていた。

——天若日子ハ掟破リノ咎ニテ監禁海
生殿ハ暫ク庵ニテ生活サレタシ——

「嘘ばかり……」

青年——海生——は和紙に墨という古風な手紙を力の限り握り締めると雨の中に放り投げた。

雨粒が手紙を打ちつけ、墨が滲み流れ出していく。灰色の空から降った透明な雨が、また黒くなつて流れていく様を海生は冷めた、それでいて泣きそうな瞳で見ていた。

「親父は処刑されたんだろう…そして、監禁されたのは俺。…そうだろう、カミサマ」

* * * * *

蝉が我が物顔で鳴き続け、入道雲が青い空を支配している暑い夏の日、若い二人の青年が神社に足を運んでいた。十代後半から二十代前半に見える二人は特に会話もなく神社の鳥居の前に立った。一人は無理矢理引つ張つてこられたのか片方に手をしっかりと握られて眉を寄せている。

「神社に何の用があるんだよ」

「…帰るんだよ、海生」

「…は？帰るつて、いつからうちは神社になったんだよ。ボケるには早いぞ、親父」

親父と呼ばれた二十代前半程の青年は息子―海生―の物言いに苦笑しながらも、黙って歩を進めた。父親の行動に理解が出来ず、文句を言いつつ抵抗しようと足を踏ん張るのだが、一見細身の父親の何処にそんな力があるのかズルズルと引つ張られていく。今まで見たこともない父親の力技に言葉が見つからず引つ張られ、鳥居の中に足が一步入った瞬間に辺りが光に包まれた。

余りの眩しさに目を手で覆うが、瞼の中ではチカチカと光が点滅し続けていた。数分ほど経つて薄つすらと目を開けるとそこは先程まで居た場所とは変わっていた。

空にある入道雲は変わらないが、目の前にあったはずの鳥居も神社も砂利道もなく、ただ大きな道がずっと遠くまで続いていた。その大通りの先には朱塗りの門が見えており、周囲は漆喰の塀に囲まれた邸らしき物が並んでいる。高い建物はなく、歩く人々は着物でも洋服でもない…平安時代の装束らしきものを着ていた。

突然の世界の変わりように海生は暫く言葉を失った。説明を求めようと隣にいるはずの父親を見るが、父親もいつの間にか周りと同じような衣装を着ていた。ついさつきまで自分と同じような格好でいたはずなのにいつの間に着替えたのか、そもそも此処は何処なのかという混乱

から海生は額を手で押さえた。

暫くすると、今まで静かだった空間にじやりじやりという土を踏む音が聞こえ、海生は顔をあげた。大通りを真つ直ぐ歩いてくるのは自分と同じくらいか、少し年上の厳しい顔つきをした人だ。その横には一人の青年が静かに付き添っている。二人は父親と海生の前まで来ると歩みを止めて二人を見た。海生は訳が分からず二人をいぶかしむ様な目で見ていたが、父親は二人が目の前に来ると膝を折り平伏した。突然の父親の行動に海生は目を丸くした。

「…お久しぶりにございます。久々くく能智神様、たけみかづちのおかみ建御雷之男神様」

「久しいな、天若日子あめのわかひこ……後ろの子どもは“忌み子”か」

（意味語…？）

父親は言われた言葉に眉をしかめて厳しい顔つきの人を睨むが、海生は何を言われているのが分からず首を傾げる。父親は厳しい表情のまま静かに言った。

「私の息子です。断じて“忌み子”ではありませんぬ」

「ならばその者はどちらに属すのだ。属す場所がないからこそ忌み子であろう」

「天と地のどちらに属せずとも私の息子です。天と地がこの子を拒否したとしても、私が今生来世永劫に息子の居場所となりましょう」

「掟破りのそなたが居場所…か。まあ、積もる話

もある。そなたの息子には一度席を外してもらおう。建御雷^{たけみかづち}」

そう呼ばれ今まで話していた人は自分の斜め後ろに控えている青年に振り返った。建御雷と呼ばれた青年は静かに頭を下げると、「付いて来て下さい」と言つて、背を向けて歩き出した。自分が何も分からないまま話が進みどうすればよいのかと混乱している海生に、父親は「行きなさい」とだけ言つた。其処にはいつもどおりの笑みを浮かべる父親がおり、海生は少し考えた後、黙つて建御雷之男神の後を付いていつた。

建御雷と呼ばれた青年は少し歩いた後、後ろを振り返り海生がついて来ていることを確認した後は、一度も振り返ることなく黙つて歩き続けていた。海生は建御雷之男神の背を見失

わないように歩きながらも、目は周囲の様子を物珍しげに見ていた。今まで自分が居た世界ではないことは薄つすらと理解していた。目の前にいる建御雷之男神の着ている衣装もまた平安時代のような衣装であり、自分が居たところでのそのような服を着る人は居なかつた。しかし周囲は漆喰で固められた堀や、大通りらしき道の先にある朱色の門、道の整備状況から見ても平安京のような印象を受けた。

「海生殿は、天若日子殿：お父君から何か聞いていらつしやいますか」

突然かけられた声に視線を辿り建御雷之男神の方を見ると、いつの間にか周囲の景色は緑一色になつていた。そしてその中に小さな庵らしき建物が隠れるように建つていた。建御雷之男

神は穏やかな笑みを浮かべて海生を見ていたが、海生にはその笑みが作り物にしか見えなかった。しかし、ここでそんなことを言つても無意味なのを何処かで悟つていた。

「何を聞くんだ？俺は、親父から何も聞いてない。この場所のことも、あんた等のことも……親父自身のことですえも」

「そうですか」

海生は静かに問いに答えた。ここで下手な反抗心を少しでも見せれば命の保障はないかもしれないという不安がそうさせていた。建御雷之男神は海生の答えを受けて考えるように地面に視線をやったが、海生の目は建御雷之男神の両手の動きと腰に佩かれた太刀に奪われてい

た。建御雷之男神が「ならば……」と言つて顔を上げた瞬間、海生の両肩はビクリと上がるのを抑え切れなかった。恐る恐る視線を上げれば、海生の思惑に反して建御雷之男神は「要点だけお話しますので、お座りください」と庵の縁側に海生を座るように促した。

そうして話された内容は海生には予想外であり、信じられないものであり、残酷だった。

この世界は、神話で言われる八百万の神が暮らす高天原^{たかまがはら}で、自分の父親が神であるという事実。父親が高天原の掟を破り葦原中国^{あしはらのなかつくに}の女性——海生の母親——と関係を持ち、海生が生まれた事実。神と人の子との間に生まれた子どもは「混血児」と呼ばれ、本来生まれてはならない存在であるということ。

全てが海生にとつては信じられないことであ

り、わけの分からない御伽噺を聞かされているようだった。海生は何も言えず自分の顔を掌で覆うことしか出来なかつた。少しでも気を緩めてしまえば涙が溢れそうだった。

「訳分かんねえ…お前等一体なんなんだよ」

「神です。それ以外の何者とも答えられませんね」

「分かんねえ！分かんねえ！分かんねえ！何なんだよ！親父が神？！どういうことだよ…じゃあ俺は何なんだよ！」

「高天原にも葦原中国にも属さない混血児です」

「混血児…そうやってお前等は俺を蔑むんだな！所詮自分達神とは違う異端児。そう言うんだろ！」

海生の叫びに建御雷之男神は何も言わなかつた。自分が何かを言つたところで今の海生には何も通じないだろうと思つてのことだ。海生はそんな建御雷之男神の態度が更に自分を馬鹿にしているように映り、突然立ち上がり胸倉を掴んだ。そうして建御雷之男神の腰に佩いている太刀に手を伸ばし、鞘から抜いた。その行動に建御雷之男神はさして驚いた素振りも見せず黙つて見つめていた。

「お前等を殺してやる…」

「殺して、どうするのですか？我々を殺したとこ

ろで貴方に利点はない。むしろ神殺しとして貴方に追尾の手がかかるだけです」

「五月蠅い！少なくともお前等を殺せば、俺はこの訳の分からない世界から抜け出せる！」

そう言つて海生は手にした太刀を建御雷之男神の首に力を込めて押し付ける。まだ血が出るほどではないが、あと少し力を入れれば太刀はいとも簡単に首を傷つけることが出来る。それでも建御雷之男神は少しも表情を変えずに黙っていた。その様子が海生を更に苛立たせ、冷静な判断能力を奪つた。太刀の柄を握りなおし、力を込めようとした瞬間、海生の後頭部を鈍器で殴られたような鈍い痛みが襲つた。海生は地面に倒れ、ぼんやりと薄れ行く意識の中、自分の上で話す声が聞こえた。

「なに殺されかけている——」

「訳も分からぬまま連れてこられ、自分が——
——ないと聞かされれば、大抵の者は混乱するでしょう」

「さあ……——の考えは理解できない。ところで、この——はどうするんだ」

「取り敢えず——にて生活をしてもらうことに——こは人も滅多に来ませんし、私の——も近いですから」

「こんな——入れたつて——すだろ」

「平気ですよ。出入り口には——かけてい

ますから、———すことは不可能です」

「それじゃあ、もう——は終わつたんだな。早いところ戻ろう…天若日子の———る」

海生は自分の体が持ち上げられ、庵の中に運ばれたのを体で感じた。それでも瞼は重くて開けることができず、建御雷之男神が誰と話しているのかは分からない。言葉も途切れ途切れにしか聞こえなかった。父親の名前を聞いて何が起こったのかを知りたかったが意識はどんどん無くなっていく。「待て」と声を出したかったが、喉も腕も動かず海生は沈んでいく意識の中で、最後の言葉を聞いた気がした。

———天若日子は既に処刑された



例会報告

いずれも場所は 兵庫県学校厚生会サンピア明石会議室 C

第16会例会

平成22年4月10日(土)午後3時 5名出席。 詩『嘘つきメール』『砂の星間旅行』 作者・令月

『願掛け』 作者・大西裕子

競演作品 短歌2首 作者・水田竜子 干し 短歌3首 作者・水田竜子 詩『くうの星』 作者・バーラ

カッシー 詩『王に捧げる神の愛』 作者・令月

第17会例会

平成22年5月8日(土)午後3時 3名出席。 秋桜 作者・夏子 あーあ『光の君』よーし『源氏の君』 作

者・高阪博一 自句自解 作者・彩華 俳句 作者・高阪博一

第18会例会

平成22年6月12日(土)午後3時 4名出席。 星に願いを 作者・高阪博一 僕と海 作者・柴小路秀磨

春、そして巡る春 作者・高阪博一

◆HPの掲示板に、夏子さんが例会報告や作品などの感想、また他の方々も感想などを上げて下さっています。ネットをご覧になれる方は是非一度覗いて下さい。また掲示板に書き込みもどうぞ。

<http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

競演 第四回

うみ

毎回、このコーナーは盛況です。案外、タイトルを決めると、物語が構成しやすいのかもしれない、と思つています。ぜひチャレンジしてください。

恐怖と安らぎの世界

大西裕子

夜の海は何もない

人の気配も 生き物の気配も

全てを波の音が消していく

自分の足元すら見えない

弱い星灯りの下 知らず不安になる

本当ニ自分ハ此処ニ居ルノダロウカ

目の前は真つ黒で

時折海の白波が

自分を手招きするかのように

闇の中に浮かび上がる

波が風の音を消し

風が波の音を消す

だから自分の耳は今何を聴いているのか

何も聴こえていないのか分からないまま



ソコニアル

足は冷たくやわらかい砂の上

波が引いていくたびに砂も一緒に流れていく

少しずつ不安定になる足元で

ただじつと前を見る

コノ先ニ自分ノ求メルモノガアルノダロウカ

闇と同じ夜の海

一歩足を踏み出せば

静かな波の音と一緒に

海は自分を受け入れてくれる

この漆黒の闇の中

自分も一つになりたくて

静かに海に身を委ねる



空に愛された海の底で

大西 裕子

広い広い溺れそうなほどの深い海
何もない暗い海の中の底深く

私はひとり泣いていた

誰にも気付かれず 気付かさず

ただひとり泣いていた

愛してほしいと思いながら

決してあの子以上に愛されないと知っていたから

いつの日か 希望を捨てた

愛してほしいと思うから辛いのだ

愛してほしいと思わなければ 辛さも何もないだろう

捨ててしまえばいい

愛されたいと思う心など

愛などいらない

愛がもらえなければ

私が愛せばいい

愛されているあの子以上に　私が愛してあげよう

深い深い海の底

名もなき深海魚が私の想いを聴いていた

広い広い海の底

私の心の奥深く

私はひとり泣き続ける

愛してほしいと思いつながら



おもがわりの海

高阪博一

真上にある太陽は光と熱を容赦なく放射する。真つ黒に日焼けした腕を組み、濃いサンングラス越しに海面を見つめる。溺れている者はいないか、異常なものが迫っていないを見張る。良太はいつものありふれた海を見ながら、「暑いなあ」と呟いた。

家の近くに小さな海岸があり、大学に入学以来、夏はそこで監視員のアルバイトをすることになっていた。四年の夏というのに就職は決まらず、暑い夏にあくせくするのも嫌なので今年もこの仕事を続けていた。多少の焦りはあるものの、決まらないのは仕方がないと思うようにしていた。それでも、テニスの審判が坐るような二メートル以上もある監視台に、長時間独りで坐つ

ているのは何となく情けないような気もしていた。

「そろそろ交代の時間やな」と思いながらばんやりと、辺りを見回してみた。真正面に淡路島が見える。島は山だけかと思うほど、木々の緑が鮮やかで、こちらの方に迫ってくる。この海峡はまったく狭いのだ。眼を東の方に向ける。大きな橋が見え、その向こうに大阪の幽かなシルエツトが見える。西の方には、陸と陸とに限られた水平線が見える。幼い頃から見慣れた風景がそこにあつた。

「海は広いな、大きいな、なんて言うけど、ここは狭いな、小さいな、やなあ」と口の中で呟いてみると、どこかで大きな海を見たことがあるの思い出した。それは友人の故郷、土佐の安芸の海だった。

去年の春休みに友人の帰省について行つた。そ

こで、実家の裏側に広がる海を見た。小石の多い海岸で、歩くとゴソゴソした感触とゴボと沈む感じに違和感を覚えたが、目の前に遮る物のない海だけの海には、言葉も出なかったことを覚えている。見えるのは打ち寄せる大きな波とただ海と空を区切る水平線だけだった。

瀬戸内海で島のある海を見慣れた人間には海だけの海は単調このうえないと思っていた。島の風景があり、そこに木々が見えるから海に彩ができると思っていた。何もない海なんて思っているのと、ふと、あの海の向こうに何かいいことがある、あの海の向こうから、何かいいものがやって来るような漠とした期待が湧いてきたのを覚えている。

「就職、決まらんかなあ。決まるわけないわ。試験も受けてへんのに」とブツブツ言っていると、背中にコツンと当る物を感じて振り返った。「ご

めん、コントロール・ミス」と言いながら近づいてくる若い女性がいた。ネイビーブルーのショートパンツに、鮮やかな黄色のヨットパーカーを着て、ちよつと濃いサングラスをかけている。上から見ているので背丈は分からないが、そう低くはない。ショートパンツから見える足はそれ程日焼けしていないが、スラリと見えた。

「ここで、フリスビーは禁止です」とぶつきらばうに良太が言うのと、「そう、怒らないの」と屈託もなく笑いながら答える。多少むつとしたのだが、それ以上言わずに黙っていると、「いつも、背中ばかり見ていたので、どんな顔をしているのかと思って、イタズラしてみたよ」と落着いた声か返ってきた。噴き出しそうになるのを抑えて、「こんな顔」と良太はサングラスを外した。「期待通りというか……、ちよつと複雑」と言いながら、「お詫びに、コーラでもおごるわ。交代あるんでしょ。

時間は？」と言うので、「もう、十分程度かな」と良太が答えると、「あそこで、待つてる」と自動販売機のある方向を指さしながら、サングラスを外した。

細い眉、眉間からすつと伸びて鼻、それに続くきゅつと締まった口、二重のくりつとした眼、キラキラと夏の陽を浴びて輝いている瞳、「ラッキーやん。可愛いやん」と思わず言葉に出そうなのを良太は飲み込んだ。「何日か前から、見ててんだけど。話すきつかけがなくて。今日は、エーイままよと投げてしもうたわ」と笑いながら見上げている。「仕事の邪魔でけへんね。それじゃ、待つてるわ」と言いながら、振り返って販売機の方方向に走って行った。

「こんな海でも、いいものはやつて来るんやなあ」と考えながら、良太は数日前にばんやり見っていたテレビのリバイバル放送を思い出してい

た。アメリカ映画で、夏休みに避暑で海辺に行つたグループの大学生が、それぞれ恋におちるというものであったが、その何となく甘い主題歌が



耳に残っていた。「あの映画みたいやな。えーと題は何やつたかな？」と思っていると、「交代やで」

と声がしたので、トントンと降りて、暑い砂浜に立った。

「この海、こんなに明るかったかなあ。それに、水平線、あんなに広がったなあ」と呟いて、ふと手にサングラスを持っているのに気付き、良太は苦笑いを浮かべた。「あと、お願いします」と挨拶をして、あの販売機の方を眺めると、黄色いヨットパーカーが揺れているのが見えた。「可愛いし、スタイルええし」と繰り返しながら、弾むようにあの鮮やかな黄色の方向に、良太は走って行った。

「はい、コーラ。お疲れさん」と濃い緑の硝子瓶を差し出されて、それを受け取り、ゴクゴクと一気に飲み干した。「ありがとう」と良太は礼を言つて、真直ぐに顔を見た。「ところで、名前、何て言うの?」と問うと、「美加」と微笑みながら答えた小さな顔に、からりと乾いた陽が降り注い

でいた。

薄い灰色の雲を通して僅かな光が射している。冷たい風が吹きぬける。ほんの数ヶ月前には、あんなに喧騒があつたのに。今見えるのは黒い小さな犬を散歩させている初老の夫婦だけだ。犬が突然波打ち際で飛び跳ねた。

良太は砂浜に立つて海を眺めていた。

あのフリスビー以来、美加と毎日のように会っていた。美加は女子大の四年、父親のコネで就職は決まっており、残り少ない大学生活を楽しんでいたのだった。会うたびに「就職はまだなん?」と言われるのが良太にとっては何となく劣等感を感じさせて、嫌なことだった。「コネのある人はいいですよね」と皮肉交じりに答えていたが、心の中では「ええ加減にしいな」と叫んでもいた。

自動車を持つていないこと、それに、免許を持つていないことも、気持ちに引つかかるものがあつた。いつも、美加の運転するスポーツタイプの車の助手席に坐り、横顔を見ているのも何となく辛いものだつた。悪気はないのだろうか、「偶には、助手席に坐りたいわ」と言われると、降りて歩きたい気持ちにもなつたものだつた。

こんな些細なことが重なつてきて、徐々に会うことが少なくなつてきた。ここ数週間はまったく会つていなかった。「それなりに就職試験も受けてるし、免許は今必要なし」と考えながら、飛び跳ねている黒い小さな犬をぼんやり眺めていた。

「あそこに監視台があつて、この辺に何軒かの休憩所が並んで……。そうや、そこに自動販売機があつた。コーラや」とついこの間のように、夏のことを思い出していた。淡路島の方から風が

吹き抜けてきた。あれだけ鮮やかな緑に包まれていた山々がくすんだようで、命の無いもののように思えてならなかった。狭い海峡を行き交う船も、あの時の滑るような速さがないような気がした。

「この海、こんな感じやつたかなあ」と良太は力のない声を出した。子供の時分から見慣れた海が、この海岸が、こんなに淋しいものだとは思わなかった。たとえ、この寒い季節であつても、風は暖かな季節を予感させるし、キラキラと銀の粉を撒いたように海面を波立たせて、吹き抜けていったものだつた。

「合わへんのかなあ」と良太は溜息をついた。「このまま、何も言わんと自然消滅」と自嘲の笑いが唇の端をよぎつた。「俺つて、草食系なんかなあ。焼肉は好きなんやけど……。どうしても、受身やもんなあ。何となく、波風の立たんこの海み

たいや。やつぱり、あのポジティブ系のひとは、
「合わへんわ」と呟いて顔を上げた。

「そや、この出会った海に棄ててしまお。あの
明るい笑顔も、時には癪にさわつた言葉も、あの
柔らかい手の感触も、みんな、いつべんに」と口に出して、「なんや、安手の歌謡曲やん」と良太は
思わず噴出してしまった。「ここで、後悔は止ま
らぬ雨のように心を濡らしている、何て言ったら
カッコ良すぎるよなあ」とブツブツ言いながら、
また波打ち際に眼をやった。犬を連れだ初老の
夫婦は手を繋ぎ何か話しながら向こうの方に
歩いていく。犬がその周りを飛び跳ねながら、纏
わりついて行つた。

青々とした淡路島の山並みが見える。心地
よい風が吹きすぎて行く。朧に霞んだ空から小
さな影がゆつくりと舞い降り、旋回しつつ海の方

に消えていく。船が西の水平線に飲み込まれて
いく。良太は透명한飲料水が入ったガラス瓶を
持つて、初夏の海を眺めていた。

滑り込みで小さな加工会社に就職ができた。
三月に卒業し四月から入社し始めたが、最初
の一ヶ月は現場研修だった。重量物を扱うので、
現場はまさに肉体労働、若いとはいえ、きつのも
のだった。五月の連休後に配属が決まり、総務
課で仕事をするようになった。上司は四十後半
の高木という男性の課長でその人が就職試験
の面接官であつた。

新人歓迎会と称した飲み会があり、その課
全員で三宮辺りにくりだした。その席で、良太
は何故自分を採用したのか、酒の勢いに任せて
聞いてみた。高木さんは「妙なこと、聞くなあ」と
笑いながら、「短時間の面接で人なんかなか
なか分かれへんけど、お前は自分が積極的でない

ことを正直に言たやろ。その正直さが気に入ったんや。それに、体育会系やないのがええ。俺はどうもあいつら好きになれん」とビールのグラスを口にもつていった。「そんなもんですかね」と良太が言うと、「そんなもんや」と高木さんはそれ以上何も言わず、「次はカラオケや。さあ、行くで」と席を立てていた。



苦手なカラオケなのだが、新入社員の良太には拒むことはできない。上手い人ならまだしも、下手な人の歌を聴き、それに拍手までしなればならないのは、たとえ礼儀であったとしても、時間の無駄でしかないと思っていた。高木さんはマイクを握ると放さないタイプで演歌

を連発で歌っていた。

「そろそろ、これで終わりにしようか」と高木さんが言うと、「最後に、課長、あれ」と誰かが声をかけた。「聴きたい？」と満更でもように顔を皆の方に向け、「そしたら、皆さんのリクエストにお応えして」とまた、マイクを握った。周りを見ると、皆ニコニコしているが、聴きたい様子ではない。やつとこれで帰れるというような顔をしている。これも処世術というものなのだろうと良太は、何となく分かったような気がした。画面が青い海になつて、スローな前奏が流れ、歌詞が映し出されてきた。

『あなたを思い出すこの店に来るたび』と始まり、曲は進んでいく。『ソーダ水の中を貨物船が通る。小さな泡も恋ように消えていった』と眼を閉じて高木さんは歌っている。

お局さんと陰で言われている隣の山本さんが

「あれ、ユーミンの曲。課長、よっぽどひどい振られかたしたんと違うかなあ。そやけどあれ、女の人の嘆き節やと思うけど」と多少同情したような、うんざりしたような顔をこちらに向けた。ユーミンと言われても、良太にはもう一つピンとこなかった。だが、グラスの中の幾筋かの泡を映すカラオケの画面が妙に目に残った。

『紙ナプキンにはインクが滲むから』と続いて歌はエンディングに入り、一寸長い伴奏だけが続いて静かに終わった。「よっしゃ、帰るで」と高木さんが持ったマイクで言うのと、皆、待つてましたとばかりに席をたつた。「こんな時はグズグズしたらあかん。すぐにタ・ツ・ノ」と山本さんが耳元で囁いた。

立っている波打ち際から、あの監視台のあつた方向に歩いていく。「なんで、自然消滅したんやろう。なんで連絡せんかつたんやろう」と泡の消

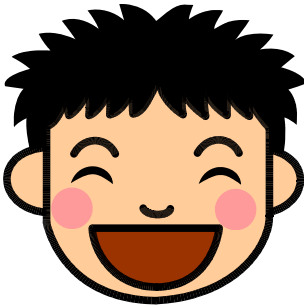
えかけた透明なガラス瓶を口に持つてくる。生ぬるい液体が喉を通つていく。「確か、あの時はコーラやつたなあ。今日はサイダーやんか」と独り言を言っていると携帯が鳴つた。

「良太やけど」と言うのと「まだ、生きててんね」と笑いながら、どこか照れたような声がした。美加だ。美加の声だ。「今、どこにいるの」と畳み掛けるように言われたので、「あの海岸で、一人淡路島、見てる」と答えると、「多少、暗らめ。今から行くわ。三十分ほど、そこで待つてて」とこちらの都合も聞かないで言うのと、携帯が切れた。

「半年振りやな。顔見たら、就職もしたし、免許も取つたし、言うぞ」と嬉しくなつて大きな声を出していた。辺りに人影はない。飛び跳ねようが、海に飛び込もうが恥ずかしくはない。心地よい風が吹き抜けていく。木々のさざめきが聞こえるように、淡路島が急に間近に見えた。手

に持ったガラス瓶を眼の高さに上げた。歪になった島と海峡が笑っているように見え、行きかう船が小さく遠くに見えた。

「課長の歌っていた…、あの歌？」と不意に歓迎会でのカラオケの画面が良太の頭に蘇ってきた。「あの歌手は…、それに最後のフレーズはなんやったかなあ？」と良太は思い出そうとしたが、汀によせる波の泡がその呟きを、そつと包んで持ち去って行った。



天上天下

大西隆史

浮き輪に体を沈め 海を漂う

波打ち際で騒ぐ泡沫たちの声が

遠くより押し寄せてくる波の音が

体の下で蠢く海水の音が

私を非日常へと誘う

私の遥か下方には

数えも切れぬプランクトン

幾億幾千小魚に

群れなし泳ぐ大魚たち

優雅な姿の貴婦人や

いかつい顔の男たち

魚類爬虫類哺乳類

私の知っている世界より

ずっと大きな世界がある

遙か彼方の水平線の先には

どんな人が住んでいるのだろうか

ぐわんぐわんと揉まれつつ

見知らぬ人の今日を想う

今日はいいい日なのだろうか

万物の母とよばれるあなたの

すこししよっぱい羊水に漂いながら



天上天下の命を想う

ああ

あなたは偉大だ

私は敬服して

ただ、静かに漂うのだ

◆例会は第2土曜日です。15時から サンピア明石

以後も第二土曜日、15時からの予定です。出欠のご連絡は不要です。

※参加希望の方は奥付編集室までご連絡下さい。詳細をご案内します。

※アクトスのHPは、<http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

※アクトスは「行動する人」の意。

◆パソコン用HPに掲示板を作成しました。ご利用ください。

編集室から

次号(第8号)は

原稿締め切りは9月末。

暑い夏が始まります。

空気も身体も心も、猫も犬も、そして、うっかりすると仕事も世の中も弛緩する季節です。

でも、原稿は書かねばなりません。心頭滅却すれば…、とは言いますが、やはり「冷房の効いた部屋で」お金がもつたいなければ「冷房の効いた図書館で」チャレンジしてください。

◆競演第5回 今回は「あき」テーマを決めました。いろいろな「あき」をお寄せください。

◎例会場のサンピアが来年3月末で廃館(?)になるようです。4月以降の例会場を考えていますが、どこかいいところはあるでしょうか？

◆入会するには◆

①会費1年分(12000円)を下の振込先に振り込み

②〒・住所・氏名(フリガナ)・年齢・職業

を明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可

〒673 - 0031 明石市宮の上1の17の614

大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

◆会費等振込先◆

郵便局

口座:00900 - 5 - 39616 大西 生一朗

※記録が残りますので、振り込みして下さい。

同人募集

アクトス 一文藝集団

新しい文芸グループ「アクトス」をたちあげました。携帯・パソコンからのインターネット参加を歓迎します。楽しく『和』を大切にします。

活動内容

- 1 特定のジャンルではなく文筆全般にわたります。
 - ①創作 ②合評(例会) ③同人誌(アクトス)の年4回発行
- 2 参加資格はありません。「書きたいという気持ち」だけで結構です。
- 3 義務は ①会費、月額1000円 入会金なし[学生は月額500円]
(会費には同人誌代・郵送費等の事務費含む)
※1年前前納。(前期・後期の2回分納可)
(途中入会は半年単位で考えます。納められた会費は返金しません。)
▶活動の具体は、以下の通りです。
 - ①作品の提出(3月、6月、9月、12月末)ー5、8、11、2月の4回、同人誌(アクトス)発行。 無料で2部受け取る。
(余分に必要時、作品提出時に申し込む、頒価1部500円。)
 - ②各月第二土曜日 学校厚生会明石サンピア 午後3時～
(例会出席は自由です。出席したときは、会場代・茶菓代などとして1000円必要)
 - ③概ね年に一度、アクトス文学賞を選考・表彰

※携帯あるいはネットだけでの参加も可能です。 ※ペンネーム推奨。

作品の提出は、携帯メール(詩・短歌・俳句など)、パソコンメール(エッセイ・小説・紀行など)で行います。扱えない方は、相談させて頂いて郵送も可能とします。

例会後は懇親会、また旅行などもおこなっています。

運営は当分の間、例会などで相談・連絡の上、会長が決定しておこないます。

平成21年1月1日 アクトス会長 大西亥一郎

連絡先: 〒673-0031

兵庫県明石市宮の上1の17の614 大西方 アクトス編集室

Tel&Fax 078-922-4562

メール: actos2008@mbe.nifty.com

◆HP <http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

[2009/11/7改訂]

◆合評会 毎月第二土曜日

※午後 3時～5時

◆場所 サンピア明石

〒673-0882

明石市相生町2丁目9番20号

TEL (078) 911-2250(代表)

FAX (078) 913-1140

JR・山電明石駅から南東へ徒歩約10分

市バス「保健センター前」下車すぐ

立体駐車場有(有料)

アクトス 第7号

平成二十二年八月一日

編集 大西亥一郎

発行

673-0031

兵庫県明石市宮の上一の十七の六一四

大西方

大和評論社 「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品(頒価)500円
